

IFOAM 有機世界大会・ふくしまからのアピール

2014年10月14日

NPO法人福島県有機農業ネットワーク理事長 菅野正寿

皆さん、こんにちは。私は日本の福島からきました菅野正寿といます。
福島は米、野菜、果物、山の幸、海の幸が豊かな農業県です。
私も米、野菜の家族農業です。娘と一緒に農業をしています。
その福島が3年前の原発事故により、山林も農地も海洋もことごとく汚染されました。
そして未だに13万人が避難しています。放射能への不安をかかえています。
皆さん、原発と人間、原発と農業は共存できません。
原発のない持続可能な社会をふくしまから訴えます。

私たち農家は事故の後も土を耕し、希望の種を蒔いてきました。
皆さん、私は有機農業が復興への光りであることを強く訴えます。
見えない放射能の科学的な検証を有機農家と大学研究者との共同の調査ですすめてきたからです。
野生のきのこ、山菜は未だに出荷制限が続いています。
それは国土の70%をしめる山林は放射性セシウムが落ち葉から樹木へ循環しているからです。
けれども耕して栽培した米、野菜は2年目にしてほとんど検出されません。
しかも微生物の多い肥沃な土壌ほどセシウムが土中に吸着、固定化されることが実証されてきました。
まさに有機農業の力が再生の光りなのです。

温帯モンスーンの日本は米づくりが3500年続いています。
この米づくりにピリオドを打つわけにはいきません。
友人の有機農家が原発から16^{km}の避難指示区域で米をつくってきました。
周囲が雑草のなか、その試験田にだけトンボが飛んだのです。
私は感動しました。
私たち農家は米、野菜だけつくっているのではない。
豊かな生き物、美しい水田、子どもからお年寄りまで共に働くコミュニティも育んできたのだと。
放射能に汚染され地域が分断されてあらためて痛感しています。
さらに山林と水を活かしたエネルギーも自給してきたことを。
私のトラクターもベジタブルオイルに切り替えました。
日本の「和食」がユネスコから無形文化遺産に登録されました。

まさに家族農業で里山の恵みと食をはぐくんできた農民こそ文化遺産ではないでしょうか。

原発事故後の 3 年間、市民団体、NPO、NGO、企業の皆さんのご支援をいただききました。

今、福島ではこの都市と農村の新しい関係がはじまっています。

大学生、市民、企業の皆さんが共に土を耕し、福島で汗を流しています。

有機農業をめざす若者もやってきます。

皆さん、これからは激しい市場競争から、土を耕し種をまく、命を育む、都市と農村の原発のない共生の時代をつくっていきましょうではありませんか。

皆さん、福島には希望があります。

子どもたちが野良を駆け回り、学生も市民もお年寄りも共に働き、人が輝き、地域が輝く福島をつくることです。

原発のない持続可能な福島をつくることです。

ありがとうございました。